

<研究報告>

## 世界の多様な音楽の教材性に関する考察

### —身体的なリズム表現を中心として—

桐原 礼 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：音楽科授業，世界の多様な音楽，多文化共生，身体表現，リズム表現

#### 1. 研究の背景と目的

今日、日本の学校において外国にルーツをもつ子供たちの数が増加傾向にあり、学校の多文化化が進行している。文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成30年度）」によれば、公立小学校、中学校、高等学校、義務教育学校、中等教育学校及び特別支援学校における、日本語指導が必要な児童生徒は10年間で1.5倍増となっており、年々その数が増している。多文化共生という現実的で困難な課題への対応が急務であることが知らされているのであり、日本語指導のみならず、学校の教育活動全体において、こうした子供たちの受け入れ体制を整えていくことが求められている。音楽科においても、クラス内の様々なルーツの子供たちとの共生に向けて、今後一層、配慮や工夫を重ねていく必要がある。

従来の我が国の学校音楽科においては、世界の様々な国および地域の音楽を取り上げ、子供たちの多様性を受け入れる素地の育成に貢献してきている。民族音楽学の研究成果を援用しながら「国際理解」「異文化理解」「国際交流」などをキーワードとした授業が展開され、近年では多文化教育から発展した「多文化音楽教育」として、世界の多様な音楽を教材とすることの重要性が示されている（桐原 2012）。世界の様々な音楽の教材化については、例えば、島崎・加藤（2013）が教材とともに体験的な活動を提示しており、坪能（坪能他 2012）は主として音楽づくりの素材として教材を提案してきた。また降矢（降矢 2009）は、多文化音楽教育の視点から国内外の音楽を教材化した。こうした研究成果が音楽科授業で広く活用されるようになってきている。近年の研究としては、杉江は、児童生徒が多様な音楽について考える基盤を構築できるような、文化的多様性を前提とした音楽科教材のあり方について検討している（杉江 2021）。今後も、児童生徒の文化的背景を異にする人々への共感的な理解を促すために、世界の多様な音楽を教材として取り上げ、それぞれの音楽が育まれてきた背景や人々の生活における意味合いなど、音楽の社会的・文化的脈絡について捉えることが重要であると考えられる。

また筆者はこれまでに、学校の多文化化が著しく進行しているスペインを対象として、多文化共生に資する音楽科授業のあり方について検討してきた。移民が多く在籍する小学校において、子供たちの音楽的な学びを深めたり、子供間の関係性を構築したりするため

に、音楽科教員が身体表現活動を積極的に取り入れていることを確認してきた（桐原 2018）。従来の我が国の音楽教育学においては、身体表現の教授法として、ダルクロワーズのリトミックやカール・オルフの音楽教育法がさかんに研究されてきており、それらの研究成果は音楽科授業に幅広く取り入れられている。また、フランスの伝統的なダンスの教材および実践の研究（吉澤 2019）、スイスの小学校音楽科における身体表現活動事例の検討（今 2018）など、海外の音楽教育における身体表現活動の動向について紹介されてきている。しかしながら、多文化共生の視点にもとづく世界の様々な身体表現の教材性に関する研究はあまりみられていない。

一般的に、身体表現とは、舞踊のように身体全体の動きによってパフォーマンスをする場合が多く、我が国の学校教育においては主に体育科教育の活動に位置づけられている。音楽科教育において身体表現を扱う場合には、リズムやフレーズなどの音楽的な要素を知覚・感受しながら、音楽的な能力を伸長することにねらいが置かれることになる。

そこで本研究においては、音楽科授業において身体表現教材を扱うことを念頭に置き、世界各地の多様な身体表現の中でも、「身体的なリズム表現」を取り上げる。映像事例について検討し、音楽科教育における多文化共生に向けた、身体的なリズム表現の教材性について明らかにすることを目的とした<sup>1</sup>。

## 2. 『学習指導要領（平成 29 年告示）音楽編』にみる多文化共生の視点

平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申において、小学校・中学校及び高等学校を通じた音楽科の成果と課題が挙げられ、それらを踏まえた音楽科の改定の基本的な考え方が示された。この中で、多文化共生に関わると考えられる事項は、一点目として「生活や社会における音や音楽の働き」や「音楽文化」についての理解を深めること、二点目に「他者と協働」というキーワードである。

一点目については、音楽科で育成を目指す資質・能力として、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」（小学校）、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」（中学校）と規定され、音楽科の目標文にこのことが掲げられている。『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編』によれば、音楽文化についての理解を深めることは、自己及び日本人としてのアイデンティティ確立や、異なる文化的・歴史的背景をもつ音楽を大切に、多様性を理解することにもつながるため、このことは音楽科の重要なねらいであり、教科として音楽を学習する音楽科の性格を明確にするものであるとされている（p.12）。これらを踏まえた学習内容の改善・充実として、中学校音楽科「B鑑賞」の指導内容において、「生活や社会における音楽の意味や役割」「音楽表現の共通性や固有性」について考えることが事項として示されるなど、従来よりも具体的に、音楽を文化として捉えることが求められている。

<sup>1</sup> 本研究は、異文化間教育学会第 40 回大会における筆者のポスター発表の一部を取り上げ、大幅に加筆・修正したものである。

## 世界の多様な音楽の教材性に関する考察

二点目の「他者と協働」することについては、先の答申を受けて、学習内容の改善・充実を図る事項の④「言語活動の充実」に位置づけられ、小学校・中学校音楽科で共通して、各学年の目標の三点目「学びに向かう力、人間性など」の涵養に関する事項として明記された。これにもとづき、目標文の中で、「協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、身の回りの様々な音楽に親しむ」(小学校低学年)、「協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、様々な音楽に親しむ」(小学校中・高学年)、「主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習に取り組み、音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽文化に親しむ」(中学校)と示された。このことは、集団において他者との関わりの中で多くの学習が行われる、音楽科の学びの特質を反映したものであるとされている。また『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』の第4章「指導計画の作成と内容の取扱い」の「1 指導計画作成上の配慮事項」(1)には、資質・能力の育成には、児童の主体的・対話的で深い学びの実現が重要であり、その際には、音楽的な見方・考え方を働かせ、他者と協働することを推奨することとされている。音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図ることが、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを考えたりしていく学習の充実につながると考えられているためである。

上記の二点は、音楽科において多文化共生に向けた取り組みを推進していくための基本的な考え方と重なるものである。今後ますます、世界各地の多様な音楽を取り上げながら、協働的な学びを展開していくことが重要であると考えられる。

### 3. 教材分析の対象と方法

音楽科授業で世界の様々な国および地域の音楽を取り上げる際に、本研究では特に、協働的な学びを促すと考えられる身体表現に着目し、その中でも、身体的なリズム表現に焦点をあてている。世界の多様な身体的リズム表現の収録映像を教材分析の対象とした。

本研究で取り上げた教材の開発者であるフランシスコ・ハビエル・ロメロ・ナランホ氏は、スペイン国立アリカンテ大学の音楽教員である。民族音楽学を専門とし、世界各地におけるフィールドワークを通して、多様な音楽表現のあり方について追究している(Romero 2008 他)。その中で、身体の動きおよびボディー・パーカッションの多様な活動やその効果などについて研究し、学校音楽教育に向けた提案をしてきている(Romero 2013 他)。調査の対象とした教材「多様な文化におけるボディー・パーカッション (Percusión corporal en diferentes culturas)」では、世界の様々な国および地域におけるボディー・パーカッションが取材され、それぞれの背景の説明とともに映像が収められている。また、これらを音楽教育活動に展開するための具体的な指導法および実践例の映像、楽譜などが組み込まれている。

分析の視点は、①世界の様々な身体的リズム表現の特徴、②身体的なリズム表現の形態、のように設定した。この際、映像事例からそれぞれの特徴を挙げるとともに、ハビエル氏の解説も取り入れながら考察していくこととした。

#### 4. 世界の様々な身体的リズム表現の特徴

映像資料においては、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、アジアにおける、身体的なリズム表現の様子が取り上げられていた（表 1）。これらについて、「子供の手遊び」「手拍子・足拍子」「舞踊におけるリズム表現・ボディー・パーカッション」「声や歌に付随した表現」の категорияで、それぞれの特徴を挙げた。続いて、身体的なリズム表現の形態について考察した。

##### 4.1 子供の手遊び

世界各地において、子供の手遊びは幼児から 10 歳以下の子供たちの間にみられるが、向かい合ったペアの形式で、「お手合わせ」が行われることが多い。モロッコの子供の手遊びでは、ペアで向かい合って歌いながら拳や手の甲を軽くぶつけ合う動きがあり、キューバでもほぼ同様の動きで手遊びが展開されている様子が収録されていた。またモロッコでは、唱え歌をしながら拳を他二人の拳に置いていったりするような遊びが収録されているが、スペインではモロッコと全く同じ唱え歌をしながら、ペアで手のひらを打ち合わせる部分が多く、その中で拳を軽く打ち合う部分が含まれていた。手遊びの中に「握手」が含まれるものとして、モロッコとスペインで、握手をしながらもう一方の手を合わせたり、連続で握手をしながら手を動かしたりする動作があった。

その他、スペインの手遊びの中で、指を組んでひっくり返して相手と手を合わせる形（日本のアルプス一万尺に出てくる動き）があったり、モロッコでは向かい合う二人が左右や上下で手拍子の掛け合いをしたりするようなものがみられた。

##### 4.2 手拍子・足拍子

アフリカ地域における、多様な手拍子の表現の仕方が収録されていた。北アフリカのグナワ人の音楽の中では、手拍子は楽器のような役割を担っている。映像では、円形であぐら姿勢の人々の中で、楽器演奏に合わせて二人の男性が手拍子をしている。手のひらをめいっぱい開いて指を伸ばした状態で、両手を重なるような手拍子の仕方である。この際、二人のリズムは異なっており、即興的にインターロッキングのようなリズムを奏でている。カメルーンの手拍子においては、片手の指を曲げた状態でもう片方の手で打ち鳴らす手拍子の仕方が紹介されている。シンコペーションが多用された手拍子リズムに合わせて、複雑な足のステップがあり、手拍子と身体のリズムが連動している様子がみられた。ソマリアの手拍子は歌に伴うものが収録されているが、両腕の手首あたりをクロスさせて反対側の上腕を叩くという、他に類をみない独特な手拍子の仕方である。

またスペイン・ロマ族の舞踊「フラメンコ」では、手拍子や足拍子で複雑なリズムと多彩な音色を表現したり、素早い動きで上半身や太腿を叩いたりするなど、身体の動きと一体となって音を奏でている。12 拍をひとまとまりとしたリズム・フレーズを手拍子と足拍子で表現することが多く、手のひらで高く大きな音を出す「乾いた音」と、手のひらを組み合わせで低く鈍い音を出す「こもった音」を使い分けて表現する。踊り手を盛り上げるために、歌い手やギター演奏者による手拍子・足拍子のリズムが加えられている。

## 世界の多様な音楽の教材性に関する考察

足のステップのみによるリズム表現としては、アメリカ合衆国のタップダンスが挙げられている。リズムやステップはアフリカ由来であり、アメリカ南部でアメリカ黒人の音楽的な表現として発展してきたものである。テンポの速い複雑なリズムを刻み、個人芸を披露する。

またメキシコのベラクルスの舞踊では、タップダンスのような足の動きが主となっている。男女がペアで踊ったり、男性のみや女性のみで前に出て来てパフォーマンスをしたりする際に、タップダンスが見せ場となっている。

その他、南アフリカ共和国の「ガンブーツ」（長靴ダンス）がある。もともとは鉱山で働いていた人々の間で生み出されたという。映像では、長靴を履いた男性 8 名ほどが一列に並んでパフォーマンスをしている。前かがみの姿勢で、長靴を叩く音と手拍子・足拍子を組み合わせ、ステップを踏みながら表現する。その中で、ソロの個人芸の見せ場もある。

### 4.3 舞踊におけるリズム表現・ボディー・パーカッション

身体表現は、舞踊のように身体全体で表現をするタイプが多いが、舞踊の一部にリズム表現がみられるものがある。また、身体全体を打楽器のように扱い、多様な音色を生み出すボディー・パーカッションの表現もある。

スペイン・マヨルカ島の舞踊においては、舞踊の途中で「お手合わせ」をする場面がある。ペアで向かい合って手拍子やお手合わせをしたり、ペアを交代したりしながら踊る様子が紹介されている。またスペイン・バスク地方の舞踊「エスク・ダンサ」では、ペアで向かい合い、各自の手のひらを合わせた形で、相手と指先同士を軽くぶついたり、各自で腿の下や腰のあたりで素早く手拍子を入れたりする動きが含まれている。

インドネシアの「サマン・ダンス」は、十数名が正座で横並びして表現する舞踊である。無伴奏で歌いながら、肩や胸、太腿などを叩いたり、隣と手をつないで腕の間をくぐったりしながら、アクロバティックで複雑な動きのバリエーションを展開していく。リズムに乗ってタイミングを合わせるのが必須となっており、床を叩いたりお手合わせのように手を叩いたりする音が、伴奏楽器のような役割をしている。

ハンガリーの舞踊「ベルブンク」は、テンポの速いステップを踏みながら、肩・胸・腕・太腿・かかとなど身体の様々な部分を叩いたり、腿の下や腰のあたりで手拍子を入れたりしながら、ダイナミックかつ複雑な動きで表現されている。

ドイツのバイエルンやチロル地方の「シュー・プラッター」は、男性の舞踊である。数名で円形または一列に並び、ステップを踏みながら、手拍子をしたり、太腿や膝を打ち鳴らしたりしながら踊る。靴の裏や床を叩くこともある。

北アメリカの「ジュバ・ハンボン」は、全身でのボディー・パーカッションの表現である。椅子に座ったまま、頬、唇、上半身、太腿など、身体の様々な部位を手のひらで叩きながら、音楽的なパフォーマンスをしており、歌を伴う場合もある。

### 4.4 声や歌に付随した表現

インドネシアの「ケチャ」は、「ラーマーヤナ物語」に組み入れられている男性合唱であ

る。円形で座った人々が「チャ」という発音をして、様々なリズム・パターンを幾重にも重ねることで、声による複雑なインターロッキングのリズム表現をしている。この中で、ボディー・パーカッションによるパフォーマンスの部分があり、手拍子のほか身体の上半身や太腿などを叩きながら表現する。

また、スペインには「机の上のボディー・パーカッション」と呼ばれる表現がある。両手を机の上に置き、拳や手のひらを机に打ち付けながら、パン屋が机の上でパン粉をこねたりパンを隣に渡したりする様子をあらわした「パン屋」のリズムがある。基本リズムは、スペインの伝統的な舞踊「ホタ」の三拍子のリズムであるという。もともとはパン屋で働く女性たちの仕事歌であったようで、スペイン各地で歌や動きに違いがあり、イタリアでも類似の表現がみられるという。

#### 4.5 身体的なリズム表現の形態

上記で挙げられた世界各地の身体的なリズム表現には、様々なフォーメーションや動きの形がみられた（表2）。

手遊びや舞踊においては、ペアで向き合って互いの動きと合わせて表現することが多い。ここでは、相手の協働によってタイミングや動きを一致させることが必要となる。映像では、スペイン・モロッコ・キューバの手遊び、スペイン・バスク地方の舞踊「エスク・ダンス」やマヨルカ島の舞踊にみられる。

集団の場合には、一般的には直立姿勢で、全体の動きに合わせて表現することが多い。他に、あぐらや正座で行うタイプは、映像では、北アフリカのグナワ人の手拍子、インドネシアの「サマン・ダンス」や「ケチャ」が挙げられる。北アフリカのグナワ人の手拍子は、音楽演奏時の他の楽器演奏に合わせて行われるため、他の人々と共に着座している。インドネシアの「サマン・ダンス」においては、正座の姿勢で、隣の人と手をつないだり、両隣の肩や腿を軽くタッチしたりするなど身体的な接触のコミュニケーションがみられ、隣の人とタイミングを合わせて表現する。「ケチャ」は、大勢で幾重もの円形を作ってあぐら姿勢で着座し、リーダーの合図とともに全体に合わせた表現をしている。ドイツの「シュー・プラットラー」も輪になって全体で同じ動きをしているが、ここでは他者との交流はなく、個人芸を披露している。

ペアでの表現は、一般的には男女ペアの舞踊であり、二重円の形態で踊り、途中でペアを交代することが多い。映像ではスペイン・マヨルカ島の舞踊が挙げられるが、世界中の多くの舞踊にこの形態がみられる。ペアの交代により、集団の中の様々な人とコミュニケーションを取りながら協働で表現をすることになる。

また、一列や二列などの列の形態で表現するタイプがある。南アフリカ共和国の「ガンブーツ（長靴ダンス）」、ハンガリーの舞踊「ベルブク」、メキシコ・ベラクルスの舞踊では、前かがみや直立の姿勢にて全員で一致した動きをする中で、列を離れて即興的にソロ表現をしたり、前列がパフォーマンスをして後列と交代したりしている。インドネシアの「サマン・ダンス」は、一列もしくは正座で二列に並び、前列と後列が即座に入れ替わったり、一

## 世界の多様な音楽の教材性に関する考察

人飛ばしで手や肩を組んだりしながら、その技巧的な芸のパフォーマンスを披露している。

以上のような様々な表現形態の中で、集団でパフォーマンスをする場合には、フリーで動き周り、自由に歩き回って混ざり合うような場面もみられた。

その他、ソロによる身体的なリズム表現は、直立の姿勢で個人芸を披露するような場合が多く、映像では、スペインの「フラメンコ」の手拍子・足拍子、アメリカ合衆国の「タップダンス」、南アフリカ共和国の「ガンブーツ（長靴ダンス）」が挙げられた。またスペインとイタリアの「パン屋」のリズムは机の上で手を動かすタイプであり、アメリカ合衆国の「ジュバ・ハンボン」は椅子に着席してボディー・パーカッションの個人芸を披露している。

### 5. 総合的考察

本研究においては、多文化共生に向けた、世界の様々な身体的なリズム表現の教材性について明らかにすることを目的とした。音楽科授業のための教材として検討するために、世界各地にみられる多様な身体表現の中でも、「身体的なリズム表現」の映像事例を対象とした。この際、分析の視点を、世界の様々な身体的リズム表現の特徴、身体的リズム表現をする際の形態、の二点とした。

世界の様々な身体的リズム表現として、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、アジア地域の身体表現の映像事例を取り上げた。それらの特徴として、お手合わせなどの手遊び、手拍子や足拍子のリズムの取り方、手拍子や足のステップの形、舞踊の一部としての身体的なリズム、全身のボディー・パーカッションの表現、声や歌に付随した表現が挙げられた。これらの特徴について、児童生徒が鑑賞したり体験したりすることにより、音楽文化の固有性や多様性の認識を促すことができる。

身体的なリズム表現をする際の形態としては、ペア、円形、列、ソロ、フリーなどがあり、直立の姿勢と正座やあぐらなど着座の場合があった。その中で身体的な接触を伴う動きや、即興的な表現がみられた。これらの形態で身体表現活動を実施することにより、他者とタイミングを合わせたり身体的な接触を伴ったりしながら直接的な交流を重ね、協働で表現を作り上げる機会を設けることができる。また、互いの表現を見合う中で、それぞれの個性を認めたり、技巧的な技を披露する機会となったりするため、クラスメイトのそれぞれの良さや特徴について、受容していくことができる可能性がある。

以上のように、音楽科授業において、世界の多様な身体的なリズム表現を教材とし、児童生徒の身体表現活動を展開することで、多様性の認識および協働を促すことができると考える。

我が国の学校において、教室に様々なルーツをもつ子ども達の存在感が増す中で、それぞれのルーツ文化などに触れることは、彼らの自尊感情を高めることにつながるほか、教室内の子供たち全体で多様性を受け入れる素地を養っていくことができる。身体表現活動において、互いの姿を確認しながら共に表現を作り上げる際には、心理的な距離を縮め、仲間意識を高めることができる可能性がある。今後は、世界の多様な身体表現を音楽科授業で取

り上げる際の、指導法や活動事例について、具体的な教材とともに提示できるよう、検討していきたい。

また、本研究において海外の様々な身体表現について検討してみると、日本の伝統的な舞踊などとは違う特徴が多く存在していることに気づかされた。例えば、日本の舞踊などにおいては、他者との身体的な接触はほとんどなく、男女のペアで向かい合って表現するケースも稀なのではないだろうか。また、速いステップやアクロバティックな動きによる複雑なリズム表現もあまり見られないのではないだろうか。世界各地においてフィールドワークをしながら民族音楽の調査をした民族音楽学者の小泉文夫は、アジアの音楽を勉強することは、同時に自分たちを再発見することでもあると述べている（小泉 2003, p.205）。日本人である自分自身を知り、日本の民衆の基層にあるものを発展させることの重要性を説いた（岡田 1995, p.13）。小泉の考えによれば、音楽科授業において、世界の身体的リズム表現について知ることは、日本で生まれ育った自分自身の音楽文化について知ることにつながるということである。文化的背景を異にする他者と自分がどのように共通または相違しているか、児童生徒が考えをめぐらせることにより、自分自身や日本の伝統的な文化について再認識することができるであろう。今後は、日本の伝統的な舞踊などの身体表現について、音楽的な側面から世界の多様な身体表現と比較検討しながら、日本の伝統的な文化への理解を深めていくための教材についても検討していきたい。

表1. 世界各地の身体的なリズム表現

地域	国名など、映像事例
ヨーロッパ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スペイン：手遊び、「パン屋」のリズム、「フラメンコ」の手拍子・足拍子、マヨルカ島の舞踊、バスク地方の舞踊「エスク・ダンス」</li> <li>・ハンガリー：「ベルブンク」</li> <li>・ドイツ：バイエルンやチロル地方の「シュー・プラットラー」</li> <li>・イタリア：「パン屋」のリズム</li> </ul>
アフリカ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・モロッコ：手遊び</li> <li>・北アフリカのグナワ人：手拍子</li> <li>・ソマリア：手拍子</li> <li>・カメルーン：手拍子とステップ</li> <li>・南アフリカ共和国：「ガンブーツ（長靴ダンス）」</li> </ul>
アメリカ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカ合衆国：「ジュバ・ハンボン」、「タップダンス」</li> <li>・メキシコ：ベラクルスの舞踊</li> <li>・キューバ：手遊び</li> </ul>
アジア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インドネシア：「サマン・ダンス」、「ケチャ」</li> </ul>



## 世界の多様な音楽の教材性に関する考察

表2. 身体的なリズム表現の形態

形態	特徴
ペア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアで向き合い互いの動きを合わせる, ペアを交代する</li> <li>・手を合わせる</li> </ul>
円形	<ul style="list-style-type: none"> <li>・円または二重円で全体の動きに合わせて動く (直立, あぐら)</li> <li>・両隣の人の肩や太腿をタッチする</li> <li>・手をつなぐ, 手を合わせる</li> <li>・リーダーの合図</li> </ul>
列	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一列または二列に並ぶ (直立, 正座)</li> <li>・前列と後列が交代する</li> <li>・列を離れて即興的にソロ表現</li> <li>・両隣の人と手をつなぐ, 太腿をタッチする</li> </ul>
ソロ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直立の姿勢</li> <li>・椅子に着席, 椅子に着席して机の上で表現</li> </ul>
フリー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由に歩き回って混ざり合う</li> </ul>

### 引用文献

- 岡田真紀 (1995). *世界を聴いた男 小泉文夫と民族音楽*. 平凡社.
- 桐原礼 (2012). 諸外国の音楽の学習に関する研究動向. *音楽教育学*, 42, 1, 日本音楽教育学会, pp.32-39.
- 桐原礼 (2018). 多文化状況下における児童間の関係性構築に向けた音楽教員の対応に関する考察—スペイン・ムルシア州におけるインタビュー調査を通して—. *音楽教育学*, 47, 2, 日本音楽教育学会, pp.25-36.
- 小泉文夫 (2003). *小泉文夫著作選集1 人はなぜ歌をうたうか 小泉文夫フィールドワーク*. 学習研究社.
- 今由佳里 (2018). ジュネーヴ州の音楽教育に関する一考察: 公立幼稚園および公立小学校における「リトミック」授業. *九州地区国立大学教育系・文系研究論文集* 5, 2, pp.1-9.
- 島崎篤子・加藤富美子 (2013). *授業のための日本の音楽・世界の音楽 世界の音楽編*. 音楽之友社.
- 杉江淑子(2021). 文化的多様性を前提とした音楽科教材の開発に向けて—研究動向と論点の整理・指導プランの検討—. *滋賀大学教育実践研究論集*, 3, pp.119-127.
- 坪能克裕・坪能由紀子・高須一・熊木眞実子・中島寿・高倉弘光・駒久美子・味府 美香 (2012). *音楽づくりの授業アイデア集 音楽をつくる・音楽を聴く*. 音楽之友

社.

降矢美彌子 (2009) . *地球音楽の喜びをあなたへー未来の地球市民となるこどもたちのための多文化音楽教育*. 現代図書.

文部科学省 (2018) . *小学校学習指導要領解説 音楽編*. 東洋館出版社.

文部科学省 (2018) . *中学校学習指導要領解説 音楽編*. 教育芸術社.

文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課 (2020). *外国人児童生徒等教育の現状と課題 (令和2年3月)*  
[https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000684204.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000684204.pdf) (2021年11月25日, 最終アクセス) .

吉澤恭子 (2019) . *音楽教育のグローバル化をめざした小学校教員養成のための世界のダンス教材開発 . 科学研究費助成事業 研究成果報告書* .  
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-26381261/26381261seika.pdf>  
(2021年11月25日, 最終アクセス) .

Romero,J. (2008). *Percusión corporal en diferentes culturas. Musica Y Educación. Número 76*, pp.45-96.

Romero,J. (2013). *Criterios de evaluación en la didáctica de la percusión corporal - Método BAPNE. Educatio Siglo XXI, Vol. 31 n° 1*, pp.235-254.

〈映像資料〉

Romero,J.(2008). *Percusión corporal en diferentes culturas, vol.1-10*, BODYMUSIC-BODYPERCUSSION, S.L.

#### 〈付記〉

本研究は, 日本学術振興会科学研究費 (課題番号: 20K02880) の支援を受けて行われた。

(2021年11月30日 受付)

(2022年 3月 1日 受理)